

**神奈川県児童養護施設等退所者追跡調査
神児研研修報告**

2013年2月

神奈川県児童福祉施設職員研究会（神児研）調査研究委員会

目次

1. 調査の背景	4
2. 調査の概要	5
(1) 調査の目的.....	5
(2) 調査の方法.....	5
(3) 調査の対象.....	5
(4) 回答の状況.....	5
3. 調査の結果	5
(1) ケースの属性.....	5
(2) 生活環境.....	7
(3) 職業	10
(4) 「不明」ケース.....	12
(5) ガイドブック活用の状況.....	13
(6) 自由記述.....	13
4. 考察	16
5. 今後に向けて	16

1. 調査の背景

近年、施設退所後の状況把握が徐々に重要視され、2011年以降いくつかの自治体で社会的養護のもとでの生活経験がある方に関する実態調査が行われている。

それぞれの調査対象、期間等は表1-1の通りである。これをみると、神奈川県における本調査以外は、退所者本人への郵送法による調査であることがわかる。この方法では、住所が把握できていることが条件であるため、対象者の数が限定される可能性がある。

例えば、東京都調査では、調査票が配布できたのは、全退所者の45.3%であり、さらに回答があったのはその37.9%である。回答は全体の約17%を表したことになる(図1-1)。

より正確な実態を把握するためには、住

所不明等となった、より困難な状況に置かれている可能性のある退所者の状況把握が必要である。

図1-1 回答の状況

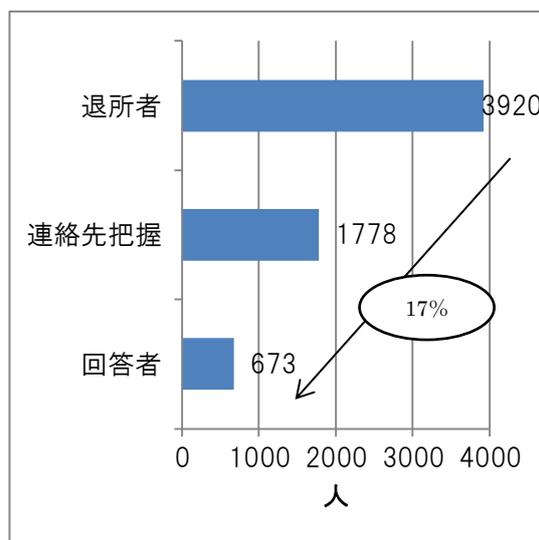


表1-1 先行調査との比較

	対象種別	対象期間	条件	回答者	調査票配布率	回答人数(回収%)
東京都(2011)	児童養護・自援・児自立・養育家庭	10年	施設が連絡先を把握している方	本人	45.3%	673人(37.9%)
大阪市(2012)	児童養護・乳児院・情短・児自立・母子	概ね5年	(郵送法のため、住所を把握できている人)	本人(保護者)	100%?	161人(25.4%)
静岡県(2012)	児童養護	5年	・ 中学卒業以上で退所 ・ 1人で社会生活を始めた人 ・ 施設が住所を把握できている人	本人	84.1%	68人(80%)
神奈川県(2012)	児童養護・児童自立・自援	5年	・ 退所年齢15歳以上 ・ 退所先が家庭(親類含む)でない	職員	<u>100%</u>	369人(100%)

2. 調査の概要

(1) 調査の目的

児童福祉施設におけるケアの神奈川県内においては、これまでに施設退所者の追跡調査が行われていない。本調査では、神奈川県における施設退所者の現状を把握し、実態に基づいた支援課題を抽出することを目的に、施設退所者の追跡調査を実施した。

(2) 調査の方法

調査は、アンケートによって実施した。

上記の通り、先行の自治体による退所後調査は退所者本人に対する調査であったため、住所不明者や回答を拒否した退所者の状況を把握するのが困難であった。そこで、本調査においては、アンケートへの回答者を施設職員とし、施設・ホームごとの回答を依頼した。

(3) 調査の対象

本調査の対象は、神奈川県内の児童養護施設、自立支援施設、自立援助ホームを平成18年度から平成22年度に退所した者とした。また、退所時の年齢が15歳以上であり、退所先が家庭（親族含む）ではない場合に限定した¹。

(4) 回答の状況

アンケート回収の結果、30カ所の施設・ホームから、412ケースの回答が寄せられた。そのうちの有効回答は369ケースであった。

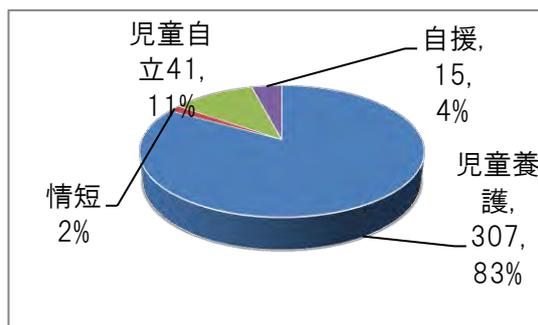
¹ 寄せられた回答のうち、この条件にあてはまらないケースは除外した。

3. 調査の結果

(1) ケースの属性

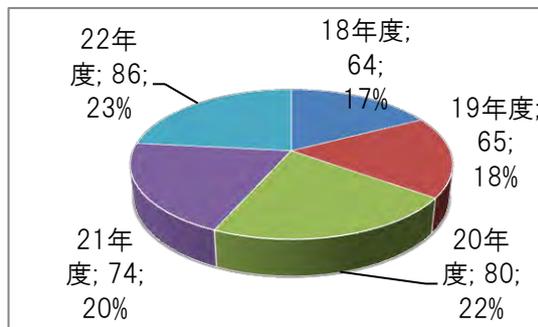
回答の寄せられたケースの属性は以下の通りであった。詳細な結果の表は巻末資料を参照。

1. 施設種別



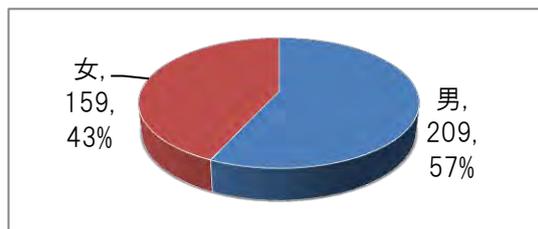
回答のあったケースの83%が児童養護施設を退所したケースであった。(表1)

2. 退所年度



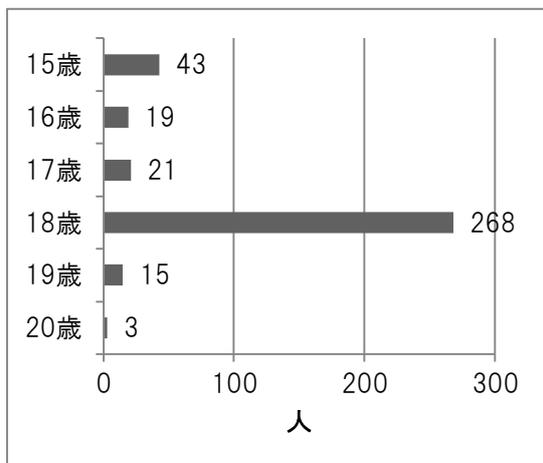
ケースの退所年度は対象の5年度間で概ね同様の割合であった。(表2)

3. 性別



ケースの性別は14%女性が少なかった。(表3)

4. 退所時年齢

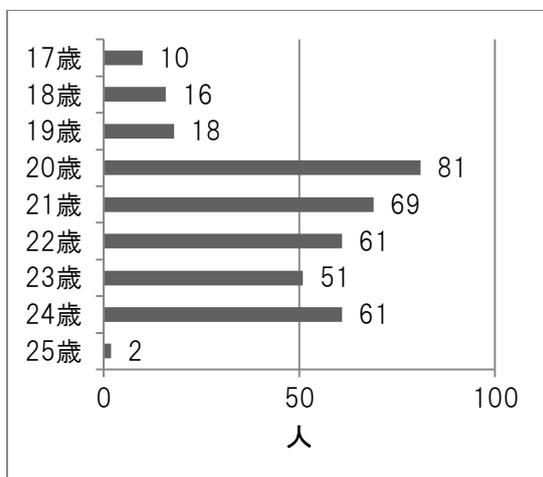


退所時の年齢は、18歳が72%と最多であった。(表4)

5. 平均在所年数

ケースの在所年数は平均約8.4年であった。

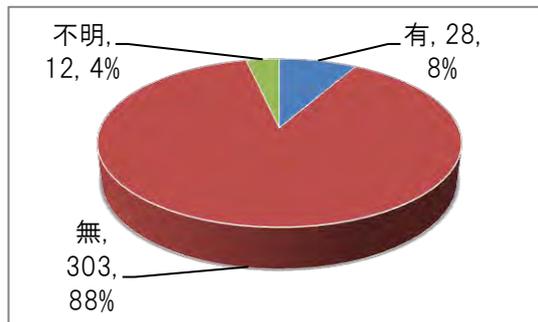
6. 平成24年度時点での年齢



退所後に経過した年数の平均は、3.8年であり、平成24年度現在の年齢は、平均21.4歳であった(表6)。

20歳が最多の約22%で、約9割が成人年齢であった(表7)。

7. 配偶者と同居の状況



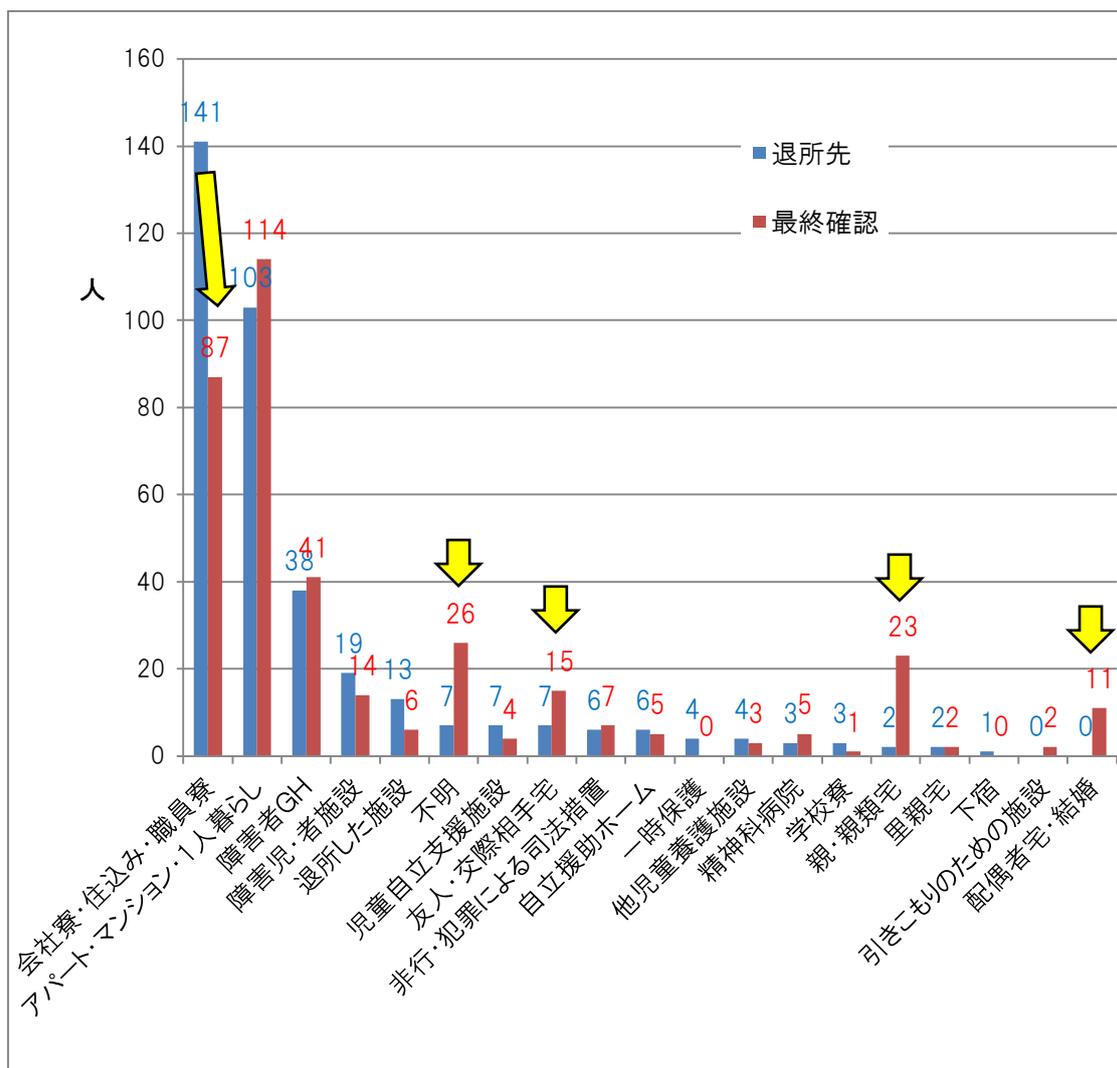
配偶者のいるケースは、28ケースで約8%であった。

そのうち、同居の状況について記入があった15ケースのうち、同居は12ケース、施設入所が1ケース、離婚が2ケースであった。

(2) 生活環境

生活環境については、質問項目の6. 退所先と7. 生活環境の推移から分析を行った。生活推移は、例として「出身施設→アパート→知人宅→住込→出身施設→住込」を示し、記入を求めた。選択肢を設けなかったため、回答者によって、居住環境の名称等にばらつきが生じた。そのため、それぞれの回答を質的に分類し、それを数値化することで量的な分析を実施した。

1. 退所後と現在の居住先の比較



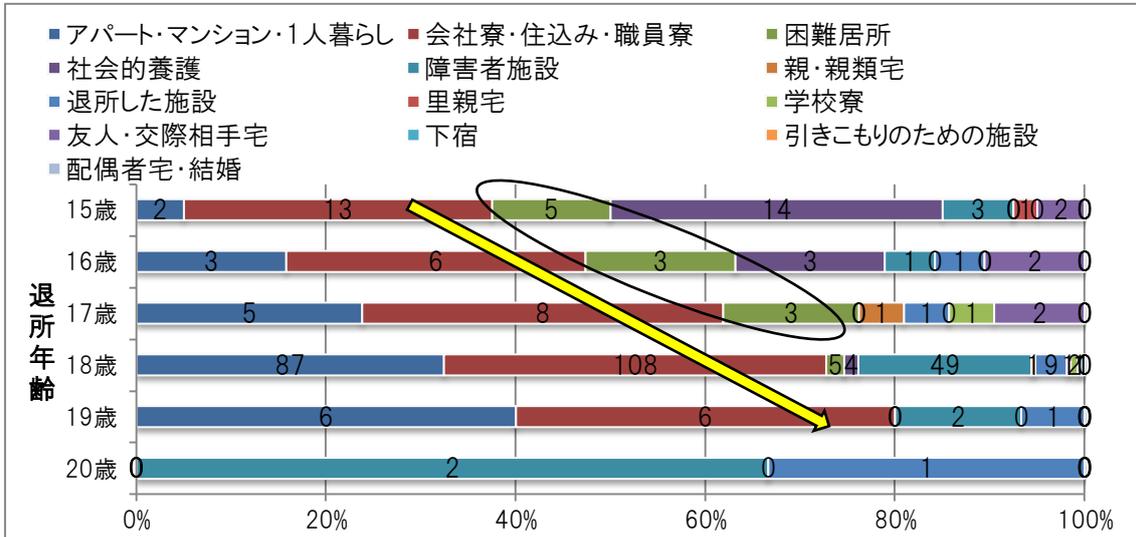
まず、退所先の居住先と現在の（最終確認のとれた）居住先を比較した。その結果、退所後、居住先として減少するのは「会社寮・住込み・職員寮」であった。

一方、増加する居住先は、「友人・交際相手宅」、「親・親類宅」、「配偶者宅・結婚」が目立った。インフォーマルなつながりを基盤とした居住先に移っていく可能性が示された。

また、居住先「不明」も増加し、退所後のアフターケアの課題として検討の必要がある。

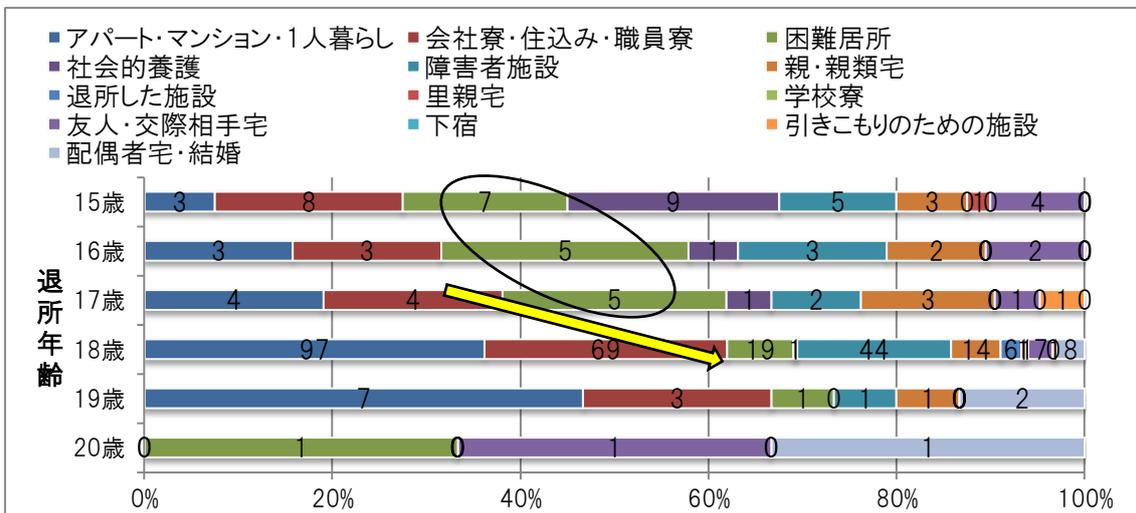
2. 退所年齢と居住先の関係

i. 退所年齢と退所した居住先



続いて、退所年齢と居住先を確認した。退所年齢が若いほど、「アパート・マンション・一人暮らし」、「会社寮・住込み・職員寮」といった、「自活」的な環境が想定される居住先に住む割合が少なかった(黄色矢印)。また、退所年齢 17 歳以下で、「不明・不安定居所」への退所が多かった(丸囲み部分)。

ii. 退所年齢と現在の居住先

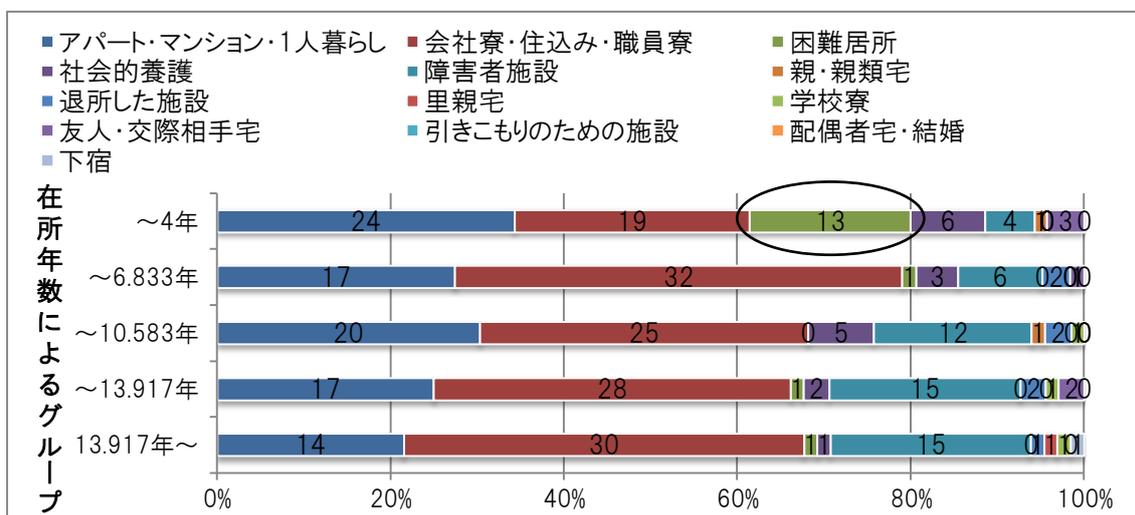


現在の(最終確認のとれた)居住先でも同様に、退所年齢が若いほど居住先が不安定な傾向が見られた。特に、現在の居住先では、17歳以下での「自活」的な居住の少なさ(黄色矢印)、「不明・不安定居所」への居住の多さ(丸囲み部分)が目立ち、17歳退所と18歳退所の間に溝がある可能性がある。退所年齢が若いほど、不安定居住先への退所が多く、その傾向は退所後(現在)にも継続する可能性が示唆された。

3. 在所年数と居住先の関係

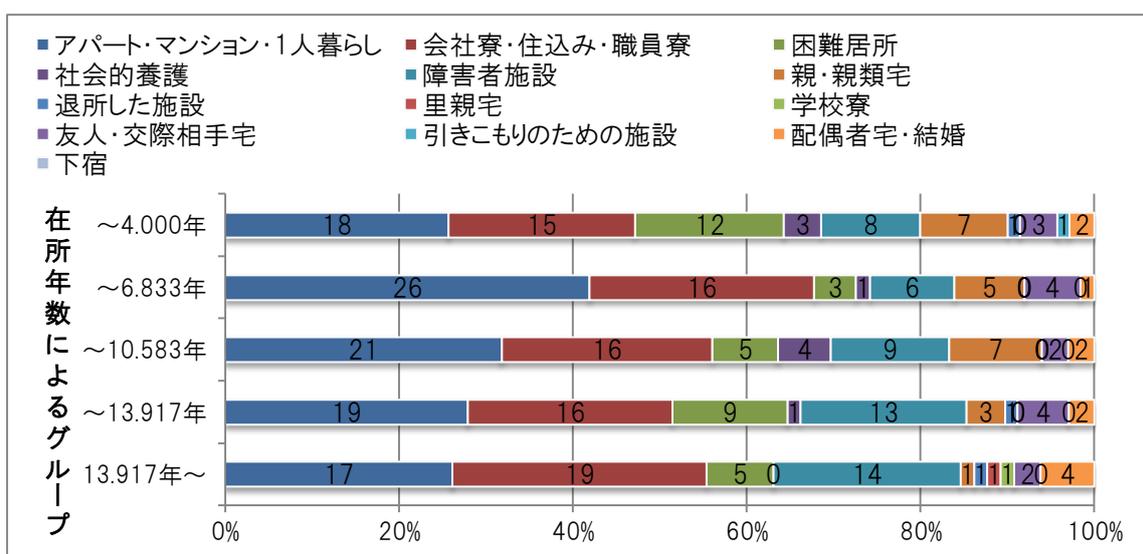
退所した児童養護施設での在所年数によって6等分し居住先について検討した。

i. 在所年数と退所先



在所年数によるグループと退所先の関係を見ると、「自活」的な環境に住む割合はばらけており、在所年数と退所先の関係では、一定の傾向は見られなかった。わずかではあるが、障害者施設への退所が在所期間の長い群に多くみられた。「不明・不安定居所」（丸囲み部分）への退所は、在所年数が最も短いグループで出現していた。

ii. 在所年数と現在の居住先



在所年数によるグループと現在の（最終確認のとれた）の関係でも、同様に一定の傾向は読み取れなかった。

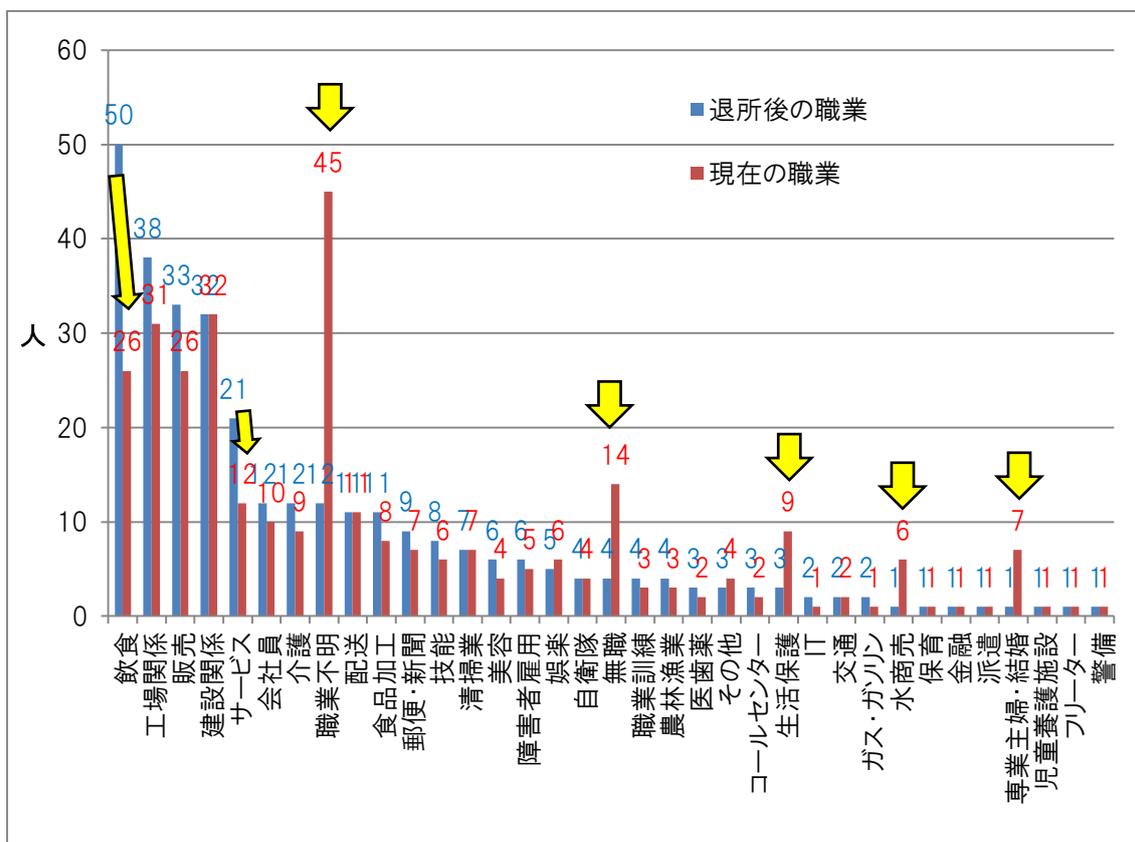
居住先と在所年数の関係は、不明瞭である可能性が示唆される。

(3) 職業

職場環境については、質問項目 8 の「職業・学歴の推移」から分析を行った。例として「高校卒業→塗装工（正）→無職→パチンコ店員(ア)→建築業（ア）」を示し、記入を求めた。選択肢を設けなかったため、回答者によって、職業の名称等にばらつきが生じた。そのため、それぞれの回答を質的に分類し、それを数値化することで量的な分析を実施した。

また、学歴と雇用状況の記入も求めたが、回答の有無や方法が定まらなかったため、それぞれを参考値として記述する。

1. 退所後と現在の職業の比較



退所後すぐに就く職業として最多なのは、「飲食」(50人)であった。次いで、「工場関係」(38人)、「販売」(33人)、「建設関係」(32人)となった。

一方、現在の(最終確認のとれた)職業では、「職業不明」(45人)が最多となった。アフターケアにおける職業把握の難しさが読み取れる。

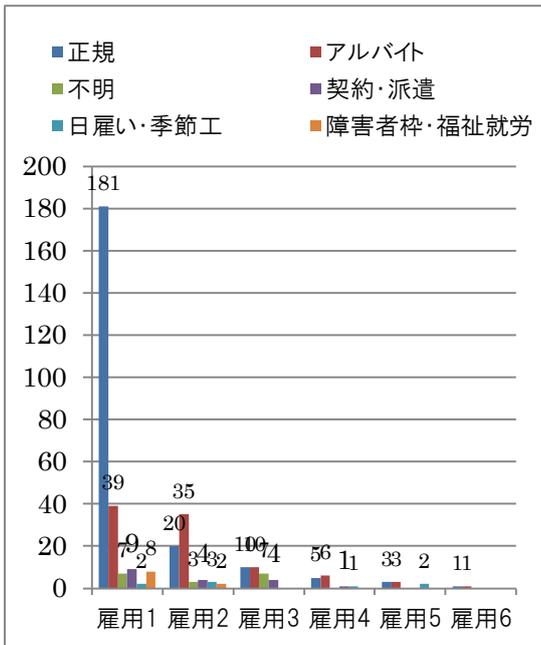
また、退所後すぐに就いた職業と、現在の(最終確認のとれた)職業を比較したところ、退所後減少する(離職する)傾向としては、「飲食」(-52%)、「サービス」(-57%)が際立っていた。

反対に、退所後増加したのは、「職業不明」、「無職」、「生活保護」、「水商売」、「専業主婦」であり、退所後の職業的な困難さがうかがえる結果となった。

参考 1：学歴(表 9)

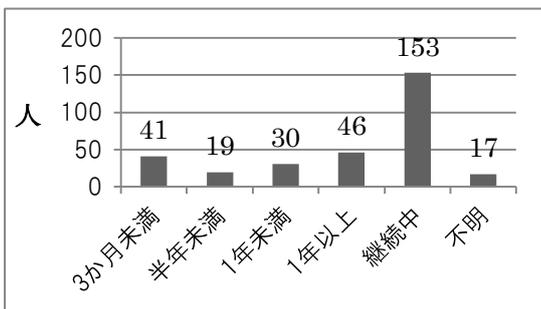
最多であったのは、高校卒業の 119 ケースであった。次いで、中卒の 27 ケースとなった。大学等へ進学したと判断されるケース（中退含む）は計 53 ケースであった。

参考 2：雇用の状況



雇用の状況は、上記グラフのようになった。転職を繰り返しても正規雇用につける数が減っている可能性がある。

参考 3：勤続の状況

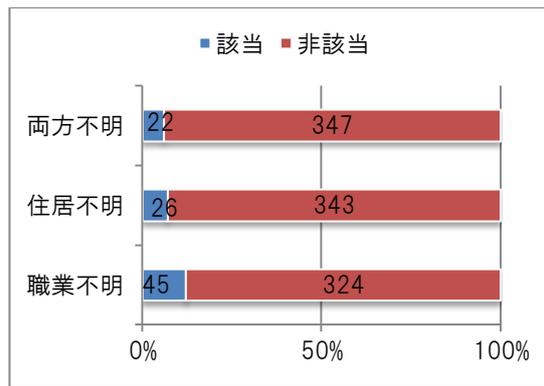


勤務年数の回答があったのもの結果は上記のようになった。

(4) 「不明」 ケース

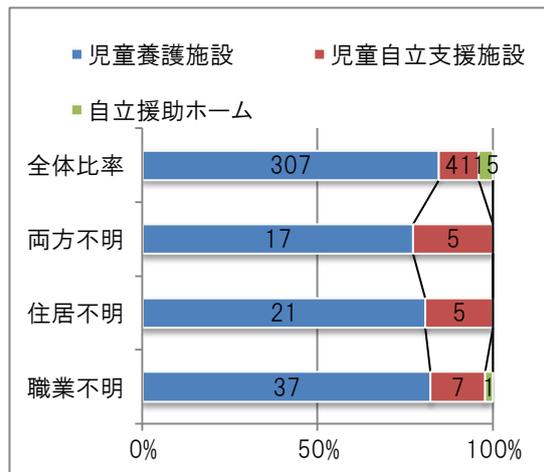
最終確認時点で「不明」のケースについて、詳細を確認した。

1. 不明ケースになる割合



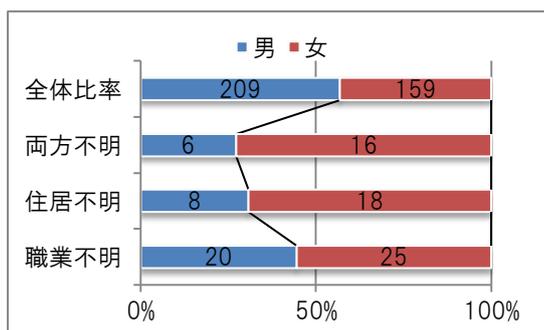
最終確認の職業が不明であるケースは 22 ケースで全体の 13.8%であった。また、最終的な住居が不明であるケースは 26 ケースで全体の 7.5%、また住居と職業の両方が不明となったケースは 22 ケース (6.3%) であった。

2. 不明ケースの施設種別



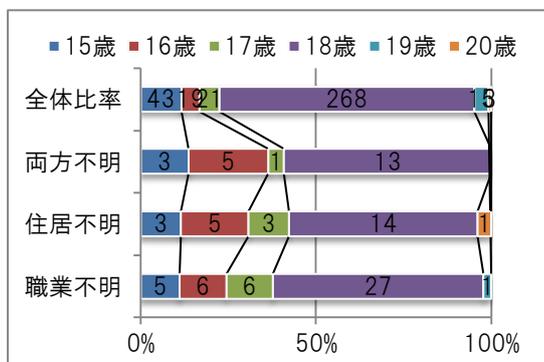
それぞれの不明ケースごとに施設種別を比較した。ケース全体の比率と照らし合わせると、自立支援施設での「両方不明」ケースがやや多い傾向となった。

3. 不明ケースの性別



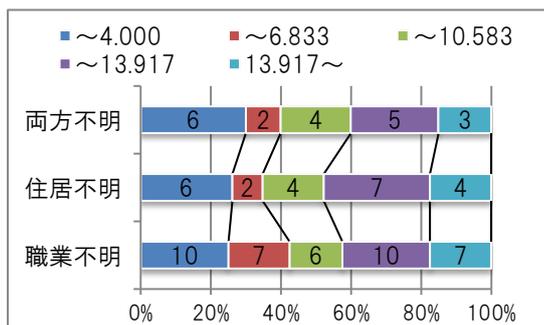
全体の性別に比率と比べても、女性の方が不明になりやすい傾向にあった。

4. 不明ケースの退所年齢



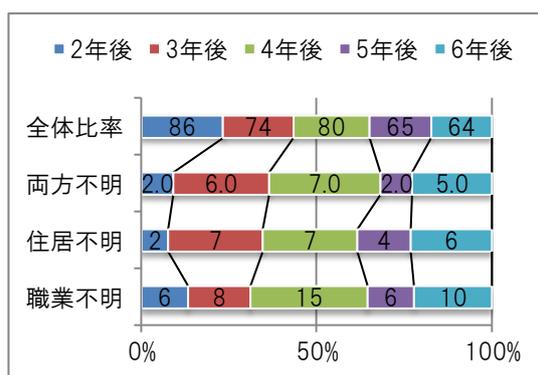
全体の比率と比べると、18歳未満で退所した場合に不明ケースに陥りやすい傾向にあった。

5. 不明ケースと在所年数の関係



在所年数の長さで均等（25%）にグループを分け、不明ケースの発生をみたが、在所年数と不明ケースとの関係は明確でなかった。

6. 不明ケースと退所後経過年数の関係



全体比率と比べると、退所3年後、4年後の不明ケースがやや多かったが、明確な傾向は読み取れなかった。

(5) ガイドブック活用の状況

以前に神児研が作成した職員向けのバンドブック「アフターケアガイドブック」について、活用したケースは、全体の約5%（18ケース）であった。

活用された項目は、経済的な負担、自立援助ホーム（2）、住居関係（3）、就労関係、女性相談関係、奨学金（3）、障害（2）、生活、生保（2）であった。（括弧内は回答数）。

(6) 自由記述

- 弟。遺産について心配はある。兄にお金が出ている（貸している）
- 1か月で仕事を辞めてしまった後、連絡も取れず、施設側の接触も拒むので、しばらくはドアノブに食糧をひっかけておいて食事を一緒にするのを誘ってみたりして家から出した。その後引きこもり支援施設につないだ。
- 20歳くらいを目途にいったんは追い出すつもり。
- 妹。度々兄には金の無心されているようだが、本人が施設にはあまり言わないようにしているため、こちら側も把握できずにいる。良くも悪くも面倒見がいいので、入所児童が駆け

込んだりしているが、そこに関しては職員と相談の上で退園生としてよく対応してくれている。

- アスペルガーの診断ある。
- ホテル兼ゴルフ場に就職。定期的に交流し、体調崩した際は、職員が看病に行ったりしている。
- 施設祭来園
- 近々結婚を考えている。
- 近隣のホテルに就職。休みの日は帰ってきたり、地域の青年会に所属しているため、よく会う。
- 近隣の市にいてもあり、定期的に交流している。退所後、2度入院した際は交替で職員が付き添った。
- 経済的理由から休学手続きを行うが、手続きが完了しておらず退学となる。その後はアルバイト生活を送っていたが、家賃滞納のため退去を申し渡されている。
- 結婚式に職員への招待状あり。
- 現在飲食店にてマネージャー勤務
- 現在少年刑務所にいるが、罪の内容自体、施設に入って児童の金品を盗んだことが発覚し、本人の更生のために、矯正施設を選択。施設が被害届を出し、逮捕してもらった。そのうえでこちらからのかかわりを続けている。
- 現在大学4年生。退職した職員との関係が良く、現在も交流を続けてくれている。
- 後輩、退所生からの金銭の巻き上げ、金銭借用問題(職員の指導・フォロー)。施設祭などで時折来園
- 高3秋に中退し退所。他県の実母宅へ引き取りになるが、神奈川県に戻る。
- 高校卒業後姉の支援を受け、アルバイトをしながら大学に進学。施設の退所生同士と連絡を取っている状況。遺族年金があるので、少しは余裕がある様子。連絡はとれている。
- 高校卒業式終了後、就職支度金を持って園を

出る。そのまま戻らず退所。就職先も決まっていたが辞退。

- 高校中退後、施設から就労していたが、見通しができず、アパートを借りて自立。しかしながら、就労が続き、転々としている、2年前に1回連絡がきた。
- 高校中退後、退所生に就労を依頼し、支援を受けながら仕事をしてきたが、退職して母元へ。連絡はとれていない。
- 高校中退後、父親の関係者から支援を受けながら仕事を続けている。連絡はとれている。
- 高卒後、自立して就労するが、病気になり退職。その後自動車の部品製造業に就労して続けている。連絡はとれている。
- 高卒後自立して就労していたが、すぐに解雇。アルバイトをしながら生活を続けている。遺産も遺族年金もあるので、まだ余裕はある様子。連絡はとれている。
- 高卒中退後、施設の卒業生に就労等を依頼し、支援を受けながら仕事を続けている。連絡はとれている。
- 今御処、無遅刻無欠席でクラスの代表に選ばれるなど頑張っている。
- 再就職先では、2年以上勤続勤務している
- 在園期間中、アルバイトをしていたホテルのオーナーが本児の学費を出してくださり、ホテルで働きながら、学校に通わせていただいたが、断念。知人宅を頼って千葉に行き、結婚し一児の母となるが、離婚し、子どもも手放す。
- 在園中、自傷行為が絶えず不安定だったが、現在は頑張っている。手紙やメールでの交流を続けている。
- 仕事も続かず、子どもができたので10代で結婚して、夫が心配ではあったが、いまのところ子どもをかわいがっているようだ。
- 施設の援助のあるアパートとは、職員の知人が家賃に関しては援助してくれて、シェアハ

ウスのように退所後児童数人で使わせていた物件。

- 施設を出たり入ったり（施設としては、可能な限り受け入れてきた）、繰り返し、現在は状況不明
- 施設長名義で借りていたアパートの家賃を滞納。退去命令が下り、自宅へ帰ることとはあったが、いまだ家賃を返納せず不明。
- 私立高校へ進学するが、4 か月で退学し定時性高校に再入学。定時制高校在学中に「ヘルパー2 級」資格を取得
- 児童養護施設からの措置（契約）変。
- 児童養護施設中卒で就労。実父との折り合い悪く、一時保護自立援助ホームへ
- 児童養護施設中卒後老人ホームに就職するも続かず、解雇。自立援助ホームへ。
- 時々、来園。
- 時々来園。現在育児中
- 自衛隊演習時、場合によって荷物を預けに来る。時折、来園。
- 自宅に帰る選択肢もあったが、自立を選んだ。早くもくじけてしまい、自宅に帰る方向で支援を継続中。
- 就職後、早々に仕事を辞めている。
- 就労先で窃盗事件（一度ではない）施設祭などで時々来園
- 出身施設の一室を利用（賃貸契約）
- 出身施設の地域の会との交流を継続している
- 新聞奨学生。
- 新聞奨学生で入社したが、大学は中退。新聞店は継続中。施設祭などで時々来園。
- 新聞店の転勤で、他県へ。後、倒産で無職。施設近くに居住のため、遊びに来園する
- 新聞配達等のアルバイトをしながら、自律して大学進学したが、厳しい状況から親元に戻り、大学生活を続けている。連絡はとれている。
- 親族からの遺産で大学進学。留学等もして、

NPOの方々からも応援をいただいている。今はブライダル関係の仕事をしている。連絡はとれている。

- 祖母・知人に借金有。高卒後の就職先を仕事のキツさと対人関係から数年で退職。その後、借金等発覚し、前担当者が関わって、現職をなんとか続けている。
- 退所後サポートセンターにて住込みの就労
- 退所時より生保受給（精神障害認定済み）アパートによる単独自立
- 退所していないが念のため記入しました。
- 退所後、GHでの生活が合わず、退去。同時に退職。実父宅へ転居後、再就職した様子。
- 退所後、アパートにて大騒ぎ。引き払うこととなり退職。その後水商売で生計を立てていた様子。
- 退所後、定職に就かず、落ち着かなかった。引っ越しの手伝い、話し合いを続け、ようやく現在の職に落ち着く。最近は園にケーキやお肉など送ってくれる。
- 退所後の就職先は間もなく無断退職。以降、職員と携帯、メールのやりとりのみ続いている。契約社員を転々とした後、現在は他県で割合安定した環境で生活している様子
- 退所後は正看護師を目指し、学校に通いながら見習いとして仕事をしていた。
- 退所後通信高校卒業（記入者加筆）
- 退所時、正社員では決まらず、退所後しばらくハローワークへの付き添いを行った。
- 退所先については、アパート（シェアハウス）である。
- 退職後1か月で解雇。解雇後2か月で再就職。
- 大みそかは彼女の寿司屋からたくさん注文でとっている。本人もその事自体喜ばしいと思ってくれているようだ。
- 大学在学中に学費工面のため水商売を。結果経済的に苦しく、大学を辞める。
- 大手居酒屋の都内店長。毎年年末にはカニや

お肉を送ったりしてくれる。

- 短大中退後行方不明
- 知的障害の手帳B2。養護学校の実習先でもあったケーキ屋さんに就職。本人の真面目さが買われ、障害枠ではない雇用。
- 中卒後、父親の関係者から支援をうけながら、仕事を続けている。通信制の高校に籍を置いている。連絡はとれている。施設の退所生の関係に依頼して就労するが続かず、姉の知人を頼って建築業に就労しながら続けている。連絡はとれている。
- 追いかければ逃げ、追いかければ逃げの生活。現在交流のあった退所生も連絡がつかなくなり、行方不明状態。
- 弟・妹在園中。実母と弟・妹との母子交流時以外の来所・面会はない。
- 同施設措置変更者と結婚。入所時に、性問題を起こしており、その時に関係をもった者が措置変更となるが、退所後の元入所者を見つけて結婚。
- 能力開発センター活用後就労
- 父からの遺産があり、施設長が未成年後見人となっていたが、本人が成人後、自分で管理することを主張。施設側は説得したがダメだった。本人が手にした後はすぐに散財し、仕事も辞めてしまった。
- 妹から金を借りたり、家を借りたり（居候したり）している。妹は施設にはあまり言わない。
- 毎月定期的来園
- 無断外出後行方不明
- 夕方まで専門学校へ行き、夕方からホテルで働いていた。
- 養護学校高等部を卒業後、グループホームへの入居待ちのため、8月まで措置延長。その間施設から通勤（5か月間）。福祉就労。

4. 考察

今回の調査からは、困難さがうかがえる住居および職業につく割合の高さから、18歳未満で退所したケースの困難が予想された。

また、不明に陥ったケースも同様に18歳未満での退所の場合に不明に陥る割合が高くなっている。（性別では、女性の方が不明になりやすくなっている。）

これは、在所年数の長短ではなく、「18歳までケアが受けられたかどうか」が要点となっていると考えられる。

翻って言えば、18歳未満で退所を余儀なくされるケースの場合には、より慎重なアフターケアが必要とされていると言える。

5. 今後に向けて

今回の調査は、施設ごとの回答により、不明ケースの状況把握に一步近づいたという点で、高く評価される貴重なデータとなった。

一方で、今回のアンケート調査では、自由記述形式部分が多く、回答の方法にばらつきが出てしまった。今年度の結果を生かし、選択肢を用いたより構造化された調査項目の作成が必要である。

以上の改善点を踏まえた上で、今後もより正しい実態把握のために、同様の調査を継続していく必要がある。